

## 琵琶湖西岸断層系北部，酒波断層の活動履歴調査

## Paleoseismological study of the Sanami fault in the northern part of the Biwako-Seigan fault system, central Japan

# 吉岡 敏和[1], 杉山 雄一[2], 宮下 由香里[3], 松井 和夫[4], 尾崎 弘明[5], 山根 博[6], 小堀 和雄[6]

# Toshikazu Yoshioka[1], Yuichi Sugiyama[2], Yukari Miyashita[3], Kazuo Matsui[4], Komei Ozaki[4], Hiroshi Yamane[5], Kazuo Kobori[5]

[1] 地調・地震・活断層, [2] 地調, [3] 地調・地震地質部, [4] ダイヤコンサルタント大阪支店, [5] ダイヤコンサルタント, [6] (株)ダイヤコンサルタント

[1] Active Fault Res. Sect., Geol. Surv. Japan, [2] GSJ, [3] Geol. Srv. Jpn, [4] Dia Consultants co., [5] Dia Consultants Co.,Ltd.

酒波断層は，琵琶湖西岸断層系の最北部に位置し，野坂山地と湖西平野の境界をなしてほぼ南北方向に延びる活断層である．この酒波断層の活動性および活動履歴を把握するため，トレンチ発掘等の調査を実施した．調査の結果，酒波断層では約2,800-3,000年前に何らかの活動があった可能性が高いと判断され，南に連続する饗庭野断層と同時期に活動した可能性が指摘される．

酒波断層は，琵琶湖西岸断層系の最北部に位置し，野坂山地と湖西平野の境界をなしてほぼ南北方向に延びる活断層である．酒波断層ではこれまでに詳細な調査が実施されておらず，その活動性および活動履歴については不明であった．地質調査所では，酒波断層の活動性および活動履歴を把握するため，トレンチ発掘等の調査を実施した．

トレンチは，酒波断層の北部にあたる滋賀県高島郡マキノ町石庭西方において実施した．この地点は，西側の山地から流れ出る新旧の扇状地が重なり合って分布している．トレンチは，段丘化した扇状地上に見られる低断層崖の延長上において掘削した．トレンチの壁面には，新期の扇状地の堆積物と考えられる礫層がほぼ全面に露出した．礫層は未固結で非常に脆く，地表面にほぼ平行に東に緩く傾斜する．礫層中には数枚の礫混じりシルト層ないし砂層の薄層を挟むが，連続性はよくない．

トレンチのほぼ中央に，東から西に約30°の傾斜で傾き下がる面に沿って礫の配列が認められ，その面を境にして地層の連続が断たれる．この礫の配列は堆積構造の可能性もあるが，トレンチ内で最も連続性のよい砂質層を追跡すると，南側壁面において，礫の配列する面を境に西側が約0.5m高くなる．また，この面の西側上方には，壁面最上部まで達する開口亀裂と見られる不淘汰な堆積物が認められる．これらのことから，この礫の配列する面は西側隆起の逆断層運動によって形成されたと考えた．

開口亀裂を充填した堆積物に含まれる木炭からは， $2759 \pm 60$ yBP (974-828 BC)の14C年代が得られた．この年代は開口亀裂が形成された年代にきわめて近い値を示すものと考えられ，酒波断層の活動時期を示す可能性が高い．

今回の調査の結果から，酒波断層の活動履歴について，明確な証拠は得られなかったものの，約2,800-3,000年前に何らかの活動があった可能性が高いと判断される．酒波断層の南に連続する饗庭野断層では，これまでの調査より約2,400-3,000年前に最新活動があったとの結果が得られており(小松原ほか，1999)，酒波断層も同時期に活動した可能性が指摘される．